

九州支部

呼吸器科 木山程莊, 衛藤安広
中路丈夫, 絹脇悦生
末梢性肺腫瘍切除症例79例の
疾病分類及び診断方法等につ
いて検討した。79例の内訳は肺癌
65例, 良性腫瘍6例, granuloma
8例であり, 良性腫瘍と
granulomaは全て術前診断得ら
れず, malignancyを否定できず
切除されたものである。79例全
体の術前診断率は74.6%であ
った。肺癌65例に限れば90.7%に
TBLB或はNeedle Aspiration
による確診が得られた。TBLB
による診断率は腫瘍径が2cm
以下のもので低下し, 又腫瘍の
存在が上葉或はS⁶のもので診断
率が悪い傾向を認めた。

25. ^{99m}Tc-Renium colloidによ る頸部及び縦隔リンパ節シ ンチグラフィ

鹿児島大第1外科 下高原哲朗
三谷惟章, 西島浩雄, 山王邦博
有村利光, 馬場国昭, 田中俊正
島津久明

我々は肺疾患症例に気管支鏡
下^{99m}Tc-Renium colloidを病変
側気管支分岐部に注入し, リン
パ節シンチグラフィ及び術後摘
出リンパ節のuptakeを測定し
た。その結果, シンチカメラに
よるリンパ節描出例は22例中,
縦隔リンパ節18例(81.8%), 頸
部リンパ節13例(59.1%)であ
った。又, 注入部位別にリンパ節
RI uptakeをみると, 左上葉支
注入群では反対側の気管傍, 上
縦隔上部にもuptakeが認めら
れた。

26. 肺癌の超音波像

久留米大放射線科 西村 浩
森口義博, 藤東寛行, 森山倫子
松岡宇一郎, 太田昌子
袋野和義, 小金丸道彦
大竹 久
今回われわれは, 昭和60年1

月から昭和61年5月までに, 腫
瘍として描出可能であった肺癌
39例の超音波像について
retrospectiveに検討した。胸
膜, 胸壁への浸潤, 肋骨浸潤の
程度評価にはある程度有効で,
腫瘍の超音波像は肝転移など
みられる超音波像に似ており,
腫瘍と無気肺の鑑別上及び放射
線治療の経過観察上有意義であ
った。今後も詳細な検討を重ね
るつもりである。

27. 肺巨細胞癌の治療経験

福岡大第2外科 白日高歩
筒井正好, 元永隆三, 荒木康雄
岩崎昭憲

肺巨細胞癌7例について臨床
像, 組織像の特徴をまとめてみ
た。年令的には60才台以下に多
発し全例肺野型である。多核あ
るいは単核の巨細胞が出現する
が, 壊死傾向が強く脈管侵襲が
高度である。1年以内の死亡例
が大半を占めた。組織学的に腺
様嚢胞癌との類似性を認める所
見はなかった。臨床像, 組織像
の特異性より, 肺巨細胞癌は独
立したentityを有する肺癌と考
えて対処すべきではないか。

28. 興味ある経過を呈した肺巨 細胞癌の1例

宮崎医大第2外科 野田裕弘
肺の大細胞癌の組織亜型とし
て巨細胞癌があるが, その発生
頻度はまれであり, また時に特
異な臨床症状を呈することが言
われている。今回, 我々は, 持
続する38~39℃の高熱, 3
~8×10⁴の白血球増多, 及び生
化学検査上肝機能障害を示し,
切除直後より以上の症状の寛解
をみた, 臨床上興味ある症例を
経験したので, 若干の文献的報
告と共に述べる。

29. 原発性肺癌患者における各 種腫瘍マーカー, 特に

NSE, BB型CK及びSCC, CA19-9, IAP, TPA, CEA の臨床的意義について

国療沖縄病院 久場睦夫
仲宗根恵俊, 宮城 茂
宮国泰夫, 伊良部勇栄
石川清司, 国吉真行, 前里和夫
赤崎 満, 源河圭一郎

肺癌における陽性率は
NSE21%, SCC28%, CA19-9
16%, IAP56%, TPA72%,
CEA34%で良性群に比しNSE,
CEA, TPAで有意に高く, 又治
療経過ともよく相関した。NSE
は小細胞癌で, SCCは扁平上皮
癌で陽性率, 平均値とも他組織
型に比し有意に高かった。CK-
BBは24%の陽性率で, 小細胞癌
においては陽性率40%, 平均値
2.45IU/Lといづれも他組織型
に比し最も高い傾向を示した。

30. 原発性肺癌の腫瘍マーカー (CEA, NSE, SCC)の臨床 的検討

長崎大第2内科 河野謙治
木下明敏, 早田 宏, 谷口哲夫
福田正明, 岡三喜男, 神田哲郎
齋藤 厚, 原 耕平

原発性肺癌における血清
CEA, SCC, NSEについて検討
した。CEAは腺癌, 扁平上皮癌
で陽性率が高く, SCCは扁平上
皮癌に, NSEは小細胞癌に陽性
率が高かった。NSEは小細胞癌
において, III, IV期例で極めて
高い陽性率を示した。SCCは扁
平上皮癌において, III, IV期例
で陽性率が高かった。CEA,
NSE, SCCのうちいずれかが陽
性であるのは, I期45%, II,
III, IV期では, 80%以上であり,
陽性率は向上した。

31. 肺癌切除例における腫瘍マ ーカー(CEA)の検討

大分県立病院胸部血管外科
山下三千年, 内山貴堯